

## 第4章 総括

### 第1節 調査成果

第2号墳の墳丘の東側は削平により失われてしまったが、既往の調査で未確認であった周溝の存在が土層断面より明らかとなった。土層断面では南北両側で周溝が確認されている。地形測量から推定される周溝外径はおよそ24m、周溝内径はおよそ20mを測る。周溝からみた墳丘の現状の高さは3.5m程に達する。周溝の規模は、上幅約2.3m、下幅1.7m前後、深さ0.5m前後を測る。周溝出土遺物は混入したとみられる古墳時代前半の土師器甕の細片1点のみである。墳丘周辺や削平部からは古墳に伴う円筒埴輪片が194点、5909.5gが出土し、今次調査の出土遺物の大半を占める。いずれも普通円筒埴輪の破片で、口縁部、体部、底部があり、突帯部や円形透孔がみられる。突帯は低平で台形に近い形状をしたものが多い。また厚手のものと薄手で堅緻なものが含まれる。破片資料のため形態が不明瞭であるが、口縁部が外反するものと外傾するものが含まれている。また黒斑がみられるものはなかった。

(小久)

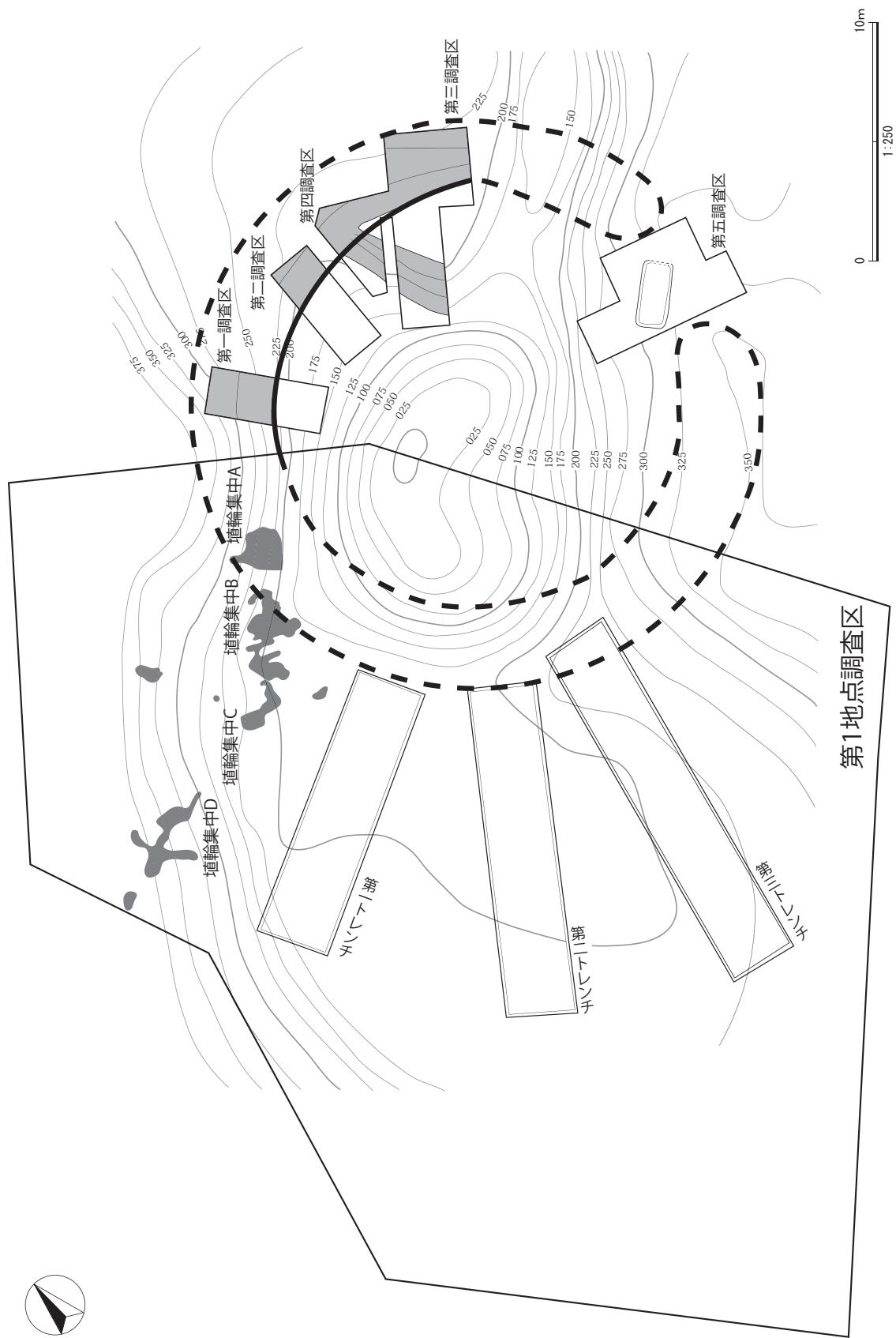
### 第2節 北屋敷古墳群第2号墳の墳形について

北屋敷古墳群第2号墳の墳形については、第1地点の本発掘調査報告書では「墳丘南西側の道路建設予定地を全面発掘したにもかかわらず、古墳に伴う周溝が未検出に終わり、最後まで墳形を明確にできなかった。このような事例は、通常の古墳調査において極めて珍しいことである」(井上・千葉1995:64頁)とされ、調査終了後に墳形確定を目的として実施した周溝確認調査の報告書でも「円形なのか前方後円形を呈するのか、周溝調査からは明確にできず、未確認のまま次回の調査に委ねられた」(井上 1995:17頁)と報告された。当古墳の墳形について言及している論考は少ないが、当古墳から出土した人物埴輪の脚部を分析した日高 慎氏は、当古墳を直径20mの円墳として理解されている(日高 1996・2013)。また、金山塚古墳の位置づけを再検討された井 博幸氏は、脚註において北屋敷古墳群第2号墳が東西に主軸をとる全長30m以内の墳丘規模を有する前方後円墳であった可能性を示唆されている(井 2007)。

北屋敷古墳群第2号墳の築造年代については、出土している埴輪の技術的・形態的特徴から陶邑編年のTK10頃に位置づけられ、6世紀前半～半ば頃と推定されている(黒澤 2010・稻村 2019)。

今般実施した第2次調査の結果、墳丘の東側において南北両側で周溝が円形状に検出され、第1地点の周溝確認調査の結果と併せて考えると円形に巡ることから第1地点の調査で確認されていた墳丘の形狀は円形であったことが確実となった。円墳であったと仮定した場合の墳丘と周溝の推定ラインを復元したものが第12図で、円墳であった場合の墳丘規模は直径16.8m、周溝外径直径23.8m、周溝上面幅2.5～3.5mとして復元することができる。直径20m以下の円墳で埴輪が樹立されているものは当地域に普遍的に存在するのであろうか。第6表は水戸市域において確認されている埴輪を伴う円墳を集成したものであるが、愛宕山古墳群第7号墳、赤塚古墳群W9号墳・W10号墳・W13号墳、稻荷塚古墳群第2号墳、牛伏古墳群第7・16号墳、杉崎コロニー古墳群第17号墳(旧内原第88号墳)など直径20m以下の円墳でも埴輪を伴う事例は幾つかあり、当地域では普遍的に存在すると言って差し支えない。

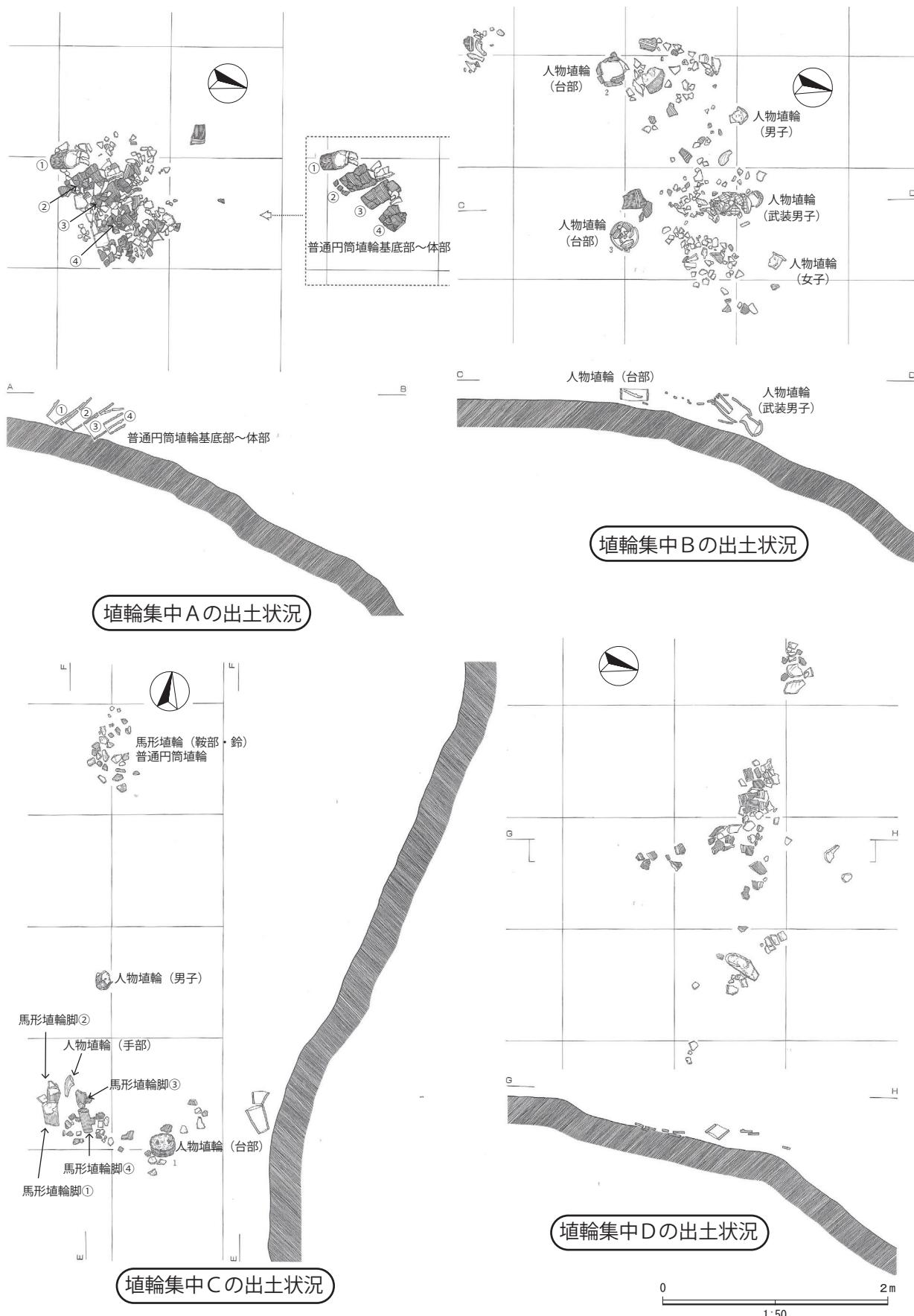
ただし、第12図のように円墳として復元した場合に問題になるのが、第1地点の調査(井上・千葉1995)で確認されている埴輪集中A～Dの出土状況(第13図)である。今一度埴輪集中の内容を再確



第12図 境形の復元素①（円墳の場合）

第6表 水戸市域における埴輪を伴う円墳

古墳の名称	墳丘規模	築造時期	内部主体	埴輪の種別	文献
荷鞍坂1号墳	直径 24 m	6世紀前葉	—	普通円筒・形象（人物・鳥・馬）	(有山編 2009)
富士山古墳群第2号墳	直径 20 m	6世紀	—	普通円筒・形象（家・馬）	(大森 1952・1974, 川口 2010)
西原古墳群第6号墳	外形 27 m, 内径 24 m	6世紀	—	普通円筒・朝顔形円筒	(川口・渥美編 2007)
愛宕山古墳群第4号墳 (狐塚古墳)	—	6世紀カ	—	普通円筒・形象（人物・器財）	(井上・蓼沼ほか 1999, 川口 2010)
愛宕山古墳群第5号墳	外径 26 m, 内径 20 m	6世紀前葉	—	普通円筒	(根本 2016)
愛宕山古墳群第6号墳	—	6世紀前葉	—	普通円筒	(根本 2016)
愛宕山古墳群第7号墳	外形 20 m, 内径 16 m	6世紀中葉	—	普通円筒・朝顔形円筒・形象（人物）	(根本 2016)
赤塚古墳群E2号墳	直径 20 m × 高さ 1 m	6世紀	—	普通円筒	(伊東 1974, 川口 2010)
赤塚古墳群E4号墳	直径 30 m	6世紀	—	普通円筒・形象（人物〈壺を頭上に乗せた女性〉・馬）	(伊東 1974, 川口 2010)
赤塚古墳群W9号墳	直径 18 m × 高さ 1 m	6世紀	—	普通円筒	(伊東 1974, 川口 2010)
赤塚古墳群W10号墳	直径 12 m	6世紀	—	普通円筒	(伊東 1974, 川口 2010)
赤塚古墳群W13号墳	直径 14 m	6世紀	—	普通円筒	(伊東 1974, 川口 2010)
稻荷塚古墳群第2号墳	直径 18 m × 高さ 2.5 m	6世紀中葉	—	普通円筒	(成島・西川ほか 2019)
千波山古墳群第1号墳	直径 20 m × 高さ 2 m	6世紀	—	普通円筒	(井上・蓼沼ほか 1999, 川口 2010)
六地蔵寺古墳	直径 30 m × 高さ 2.5 m	6世紀	—	普通円筒	(井上・蓼沼ほか 1999, 川口 2010)
フジヤマ古墳	直径 21 m × 高さ 3.6 m	6世紀後葉	横穴式石室	普通円筒・形象（馬）	(井上・蓼沼ほか 1999, 川口 2010)
牛伏古墳群第16号墳	直径 15 m × 高さ約 2 m	5世紀後葉	—	普通円筒・朝顔形円筒・形象（馬）	(井・小宮山 1999, 田中 2010)
牛伏古墳群第7号墳	直径 18 m × 高さ約 1.5 m	6世紀初頭	—	普通円筒	(井・小宮山 1999, 田中 2010)
杉崎古墳群第20号墳	直径約 20 m × 高さ 4.5 m	6世紀後葉	—	普通円筒	(井・小宮山 1999, 田中 2010)
杉崎古墳群第40号墳	直径 25 ~ 30 m × 高さ約 3 m	5世紀末	—	普通円筒・形象	(井・小宮山 1999, 田中 2010)
杉崎コロニーアーク墳群第17号墳 (旧内原第88号墳)	直径 18 ~ 20 m × 高さ約 1.5 m	6世紀後葉	木棺直葬	普通円筒・朝顔形円筒・形象（人物・鶏）	(井・小宮山 1999, 井・市毛 1980, 田中 2010)
大塚古墳群第3号墳	直径 20 ~ 25 m × 高さ 1 m	6世紀前葉	—	普通円筒	(井・小宮山 1999, 田中 2010)
舟塚古墳群第2号墳	直径 28 m	6世紀中葉	—	普通円筒埴輪	(井・小宮山 1999, 田中 2010)



第13図 北屋敷古墳群第2号墳の埴輪集中A～Dの出土状況

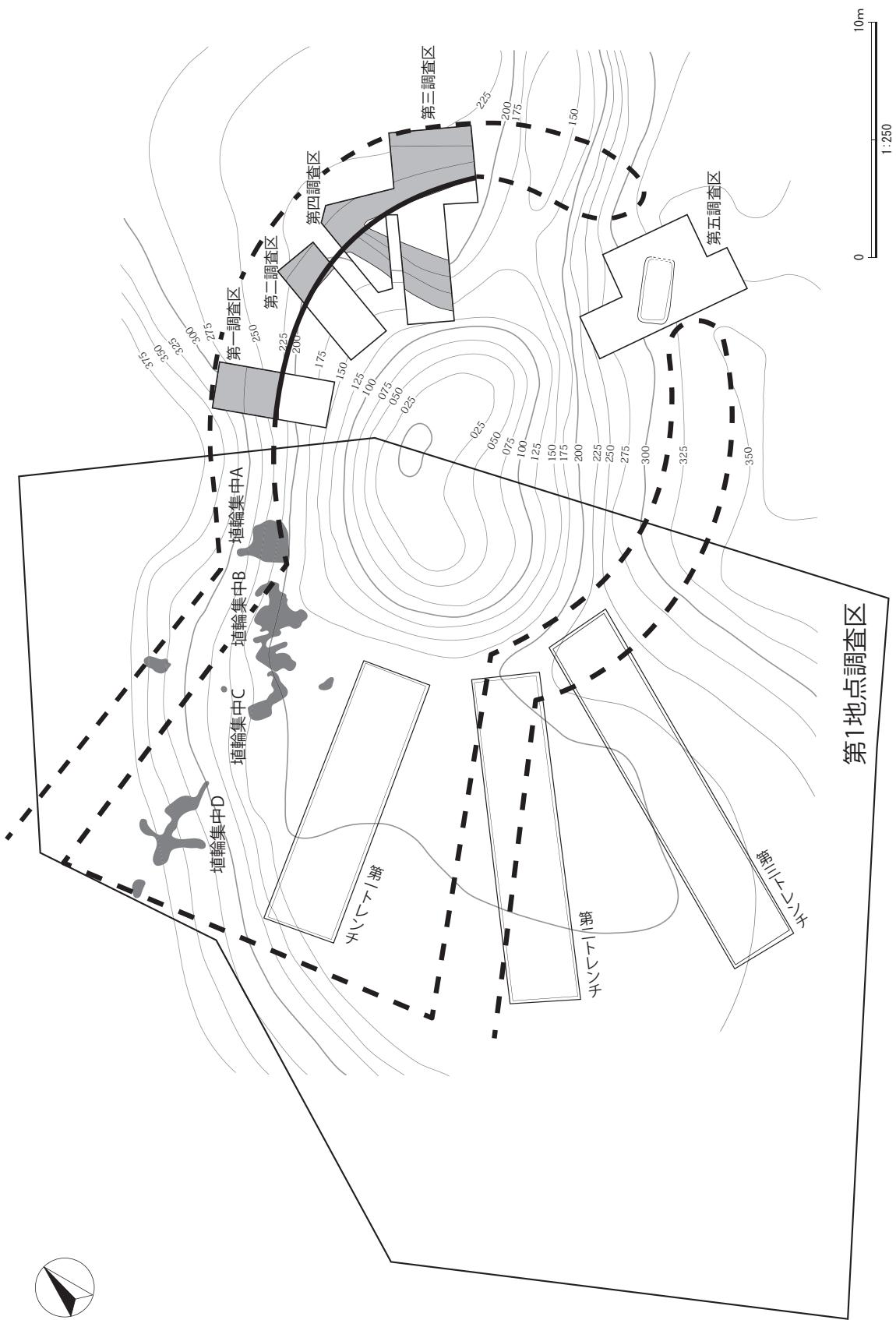
認しておこう。

埴輪集中Aは円筒埴輪が折り重なる状態で出土した集中部で、円筒埴輪の基底部～体部が50°～70°の角度で傾いた状態で検出されている。この状態から基底部は原位置を保っていると理解される。埴輪集中Bは形象埴輪が多く出土した集中部で、分離造形による人物埴輪の半身像を載せる台部2点が原位置の状態を保っていたほか、男子と女子の頭部・胴部・腕部・手部や衝角付兜を被り灰色系顔料により彩色された挂甲を着た武人埴輪が倒れた状態で出土している。埴輪集中Cは人物埴輪の基部や馬形埴輪の脚部2本が20°の角度で傾いた状態で検出されているほか、その周囲から人物の胴部、腕部、普通円筒埴輪の破片が出土している。また、北側からは離れて男子の頭部や馬形埴輪の鞍部や鈴、普通円筒埴輪の破片がまとまって出土しており、上方から転落したものと理解されている。この状態から人物埴輪の基部と馬形埴輪の脚部については原位置を保っていると理解される。埴輪集中Dは大部分が普通円筒埴輪の破片で、馬の脚部（埴輪集中Cの脚部とは別個体）の破損品が検出されている。普通円筒埴輪については基底部を残す4本のうち一部を除き原位置から遊離して破損しているように見受けられると報告されている（井上・千葉前掲）。

以上が埴輪集中A～Dの出土状況の概略であるが、埴輪集中A～Dの大部分の埴輪については原位置を保った状態で列を形成していると理解される。そうすると、円墳として復元した第12図の案だと原位置を保った埴輪列が周溝内やさらには周溝の外周部よりも外側に並ぶことになってしまい、円墳案は成立が難しくなってしまうのである。

この埴輪の出土状況について井 博幸氏は北屋敷古墳群第2号墳の墳形を特定するヒントが見いだせると指摘する（井前掲）。井氏は「これらの埴輪群は個体ごとにまとまる比較的良好な出土状況で、後世に攪乱を受けた形跡はなく、墳頂側からの土圧をうけ、墳端部に向かって傾斜した状況が看取される。とくに、ほぼ全ての個体の基底部の位置が面的・高度的に揃っていることは、これらの埴輪群が本来の樹立位置から大きく動いていないことを示している。さらに重要な点は、全体の遺物分布がC・Bブロックを中心に「く」の字状に折れ曲がり、個々の埴輪も墳頂の傾斜に沿って微妙に方向を違えながら遺存する点にある（井上1995：図版12参照）。これはBブロックの西端・Cブロックの東端付近に、くびれ部に相当する屈曲が存在したことを明示している、と考えるのが自然であろう。」（井前掲：78頁）という極めて重要な指摘を行っている。さらに井氏は「墳丘中段の北側、この屈曲部を中心に西から東に向かって、円筒4本→馬・馬→女子・女子→男子（武人）→女子/男子→円筒4本の樹立状態が推測されている（前掲書：30）。これは、墳丘北側の中段に、前方部から後円部にかかる付近に形象埴輪群を樹立した石岡市（旧八郷町）丸山4号墳（後藤・大塚 1957）、千葉県姫塚・殿塚古墳（橋本 1980）などと共通する配列状態である。また、墳丘の北側を強く意識した配列形態などは牛伏4号墳（井ほか 1999）にも共通する特徴であり、初現的な北面重視の事例として注目される。以上から、北屋敷2号墳はほぼ東西に主軸をとる前方後円墳であったと判断されるのである。そして、現状の墳丘規模（径16m前後）から考え、金山塚古墳とほぼ等しい全長30m以内の墳丘規模を有していたのではないかと想定したい」（井前掲：78頁）と当古墳が前方後円墳であった可能性が高いこと、その主軸方位や規模についても具体的に言及されている。

第1地点の調査では墳丘の北西側に形象埴輪が集中して出土しているのに対し、その後に実施された周溝確認調査では、第五調査区を除く全ての調査区で形象埴輪は1点も検出されず、全て円筒埴輪（朝顔形円筒埴輪1点を含む）であった（井上 1995）。特に第三・四調査区の周溝内側の上場付近に50～70cmの間隔で列状に6基並んで検出された直径20～30cmほどのピットは、1基の内部に円筒埴輪



第14図 墳形の復元案②（前方後円墳の場合）

の基底部が傾いた状態で出土しており、この出土状況からこれらのピットは円筒埴輪を樹立する際に構築されたものと理解される。このような形象埴輪群の偏在的分布も墳丘の東側が後円部であった可能性を示唆するのではないか。

井氏の論文は金山塚古墳の位置づけについて論じたものであるため、北屋敷古墳群第2号墳の墳形復元図は示されていないが<sup>1)</sup>、井氏の指摘に基づき第2号墳が前方後円墳であったと仮定した場合の墳丘と周溝の推定ラインを復元してみた（第14図）。第1地点の調査時には前方部らしき高まりや地形上の痕跡は確認されておらず、周溝も確認されていないため、想定の域を出ないことは重々承知しているが、全長32.5m、後円部径17.5～18.5m、後円部周辺の周溝上面幅2.5～3.0m、くびれ部幅9.5m、くびれ部付近の周溝上面幅2.5m、前方部長15m、前方部幅17m、前方部付近の周溝上面幅2.5mで、西に前方部を向ける形<sup>2)</sup>で大胆に復元してみた<sup>3)</sup>。周溝確認調査で検出された周溝の内径の湾曲が少しきつく、埴輪集中Aで検出された円筒埴輪4本の基底部付近を連結すると後円部径は真円に復元することが難しいなど、やや歪な点は否めないが、先行研究でも指摘されているように墳形を前方後円墳として復元する案の方が埴輪の出土状況や周溝の形状などの面で矛盾が少ないよう思う。

（川口）

#### 註

- 1) 井氏の論文に北屋敷古墳群第2号墳の詳細な墳丘復元図は図示されていないが、56頁に掲載されている第1図 金山塚古墳周辺の地形と古墳分布図（1/5000）には北屋敷古墳群第2号墳が西に前方部を向ける前方後円墳として示されている（井 2007）。
- 2) 第1地点の調査時に作成された墳丘測量図の等高線を詳細に観察すると、墳丘から東側へと等高線が直線状に13mほど伸びており、この部分はあたかも前方後円墳の前方部のようにも見える。ところがこの部分を前方部として理解すると原位置を保っている埴輪列との整合性が取れない。また、この部分を前方部とした場合、後円部の墳頂部に比して前方部の墳頂部が1.5mも低くなってしまうなど、後期古墳というよりは前期古墳の墳形の特徴に近くなってしまい、古墳の年代観との矛盾が生じてしまう。この部分は尾根状の自然地形と理解すれば問題はない。なお、墳形は異なるが直径20m以下の円墳の事例として取り上げた荷鞍坂1号墳にも11mほど周溝が途切れている陸橋が認められ、杉崎コロニー古墳群第88号墳でも北屋敷古墳群第2号墳と同様に陸橋中央部に墓坑の可能性がある長さ1.9m×幅0.8～0.9m×深さ0.5～0.7mの長方形の土坑が検出されている（井・市毛 1980）。
- 3) 井上義安氏による第1地点の本発掘調査時に作成された地形測量図と発掘調査区の平面図は、国土座標系上に載せたものではないため、今次調査の成果と図上で合成することが困難であった。従って、復元案に示した墳丘規模の数値は今次調査により得られた第6図の推定周溝ラインから復元される後円部径や周溝の内径・外径と若干の齟齬があるが、既に失われた地形も含めた全体像を示す事に主眼に置きあえて第1地点の調査時に作成された地形測量図と発掘調査区の平面図に基づき墳丘復元案を示したことをお断りしておく。